国営伊那西部農業水利事業

—緊急発掘調査報告—

堀の内遺跡

1980

伊那市教育委員会

堀の内遺跡

目　　次

目　　次……(1)
挿図目次……(2)
図版目次……(2)

第Ⅰ章　発掘調査の経過……(3)

第1節　発掘調査の経緯……(3)
第2節　調査の組織……(3)
第3節　発掘日誌……(4)

第II章　遺　　構……(6)

第1節　建物址……(9)
第2節　第Ⅰ区地層……(9)
第3節　城郭址と堀址……(11)

第III章　遺　　物……(13)

第1節　土　器……(13)
第2節　把　手……(16)
第3節　石　器……(16)

第IV章　ま と め……(17)

挿　図　目　次

第１図　第Ⅰ区遺構配置図……（６）
第２図　城郭址実測図……（７）
第３図　建物址実測図……（９）
第４図　第Ⅰ区土層実測図……(10)
第５図　第Ⅰ区土層実測図……(10)
第６図　堀址実測図及び断面図……(11)
第７図　土器実測図……(13)
第８図　土器実測図……(14)
第９図　土器拓影……(15)
第10図　把手実測図……(16)
第11図　石器実測図……(16)

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　遺　　構
図版３　遺　　構
図版４　遺　　構
図版５　遺構・土層及び遺物出土状況
図版６　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として，竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに附設する計画が実施される運びとなった。伊那市においては，西箕輪，西春近地区がこれに該当し，昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡，昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡，金鋳場遺跡の調査が行われてきた。本年度は宮垣外遺跡，天庄Ⅱ遺跡，堀の内遺跡，小花岡遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和54年7月12日　県教育委員会より関指導主事が来伊し，予算査定をする。

昭和54年7月18日　西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをする。

昭和54年7月23日　西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをして，発掘承諾書をいただく。

昭和54年7月24日　伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

堀の内遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢　一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽　映士	伊那市教育委員長
〃	向山　辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	北村　忠直	伊那市教育委員会前教育次長
〃	三沢　昭吾	〃　教育次長
〃	石倉　俊彦	〃　社会教育課長
〃	有賀　武	〃　〃　課長補佐
〃	米山　博章	〃　社会教育前係長
〃	武田　則昭	〃　社会教育係長
〃	沖村喜久江	〃　社会教育主事

発掘調査団

団長	友野　良一	日本考古学協会会員
副団長	根津　清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚　政美	〃

調　査　員　　福沢　幸一　　長野県考古学会会員
〃　　田畑　辰雄　　〃
〃　　小木曽　清　　宮田村考古学友の会会長
〃　　春日　徳明　　大正大学学生

第3節　発　掘　日　誌

昭和54年9月4日　テントを現場へ移し，第1区の南側の位置に建てる。堀の内遺跡の北側の桑畑一帯をⅠ区と決める。テントができ次第，グリットを設定していく。グリットは1辺を2m×2mにしておく。グリット名は南，東の角をA1にて，東から西へA～C，南から北1～18とする。

昭和54年9月5日　第Ⅰ区のA1から掘り始めていく。A5，B5附近から多量の土器片の出土をみた。これらの土器片は勝坂式，加曽利E式，加曽利B式，晩期等々各種であった。A7からあとは層位が浅く，50～60cm位で山崩れの青ネバ層がみられた。夕方までかかってⅠ区の設定したグリット全てに手をつけた。

昭和54年9月6日　第Ⅰ区のA4，A5，A6，B4附近の多量の土器出土附近を拡張していく。拡張していくと，黒色土層面に多くの土器の出土がみられたので，そのレベルを主眼において拡張を進めていく。

昭和54年9月7日　昨日の黒色土層面を精査していくと，ところどころにかたい部分がみられた。聞くところによると，この附近に明治後半まで家があったことは事実であり，したがって，その当時の土間と考えられた。

昭和54年9月8日　本日は堀の内遺跡の城館のなかを2区としてグリットを設定した。グリットは南から北へA～Cと，東から西へ1～8とする。さらに堀のセクションをとれるようにする。

昭和54年9月10日　堀のなかに設定したグリットの掘り下げを実施していく。遺物は相当量出土したが，遺構の存在は把握できなかった。耕土の深さは40～50cm位で，割合に浅く，しかも範囲が限られていたので，夕方までには，ほぼ完了する。堀はセクションをと

発　掘　風　景

るように掘り下げ，ほぼ完掘を終了する。堀底より人骨や朝鮮キセルの出土があった。

昭和54年９月11日　本日は明治後半に移築したと思われる家の土間附近の清掃をして写真撮影をする。さらに，その平面，断面実測を終える。堀のセクションの清掃をして，写真撮影をする。城館址の全体的な地形測量を行う。

昭和54年９月12日　昨日，実施した明治時代後半に移築した家の土間の下を掘り下げてみると，多量の土器の出土はみられたが，遺構の存在ははっきりしなかった。堀のセクションを実測する。城館址の全体的な地形測量を行う。

昭和54年９月13日　明治時代後半に移築した家の土間の下を掘り下げていき，層位と土器の出土状態を確認してみる。城館址の全体的な地形測量を行う。本日をもって，堀の内遺跡の発掘を終了し，あとかたづけをする。

昭和55年１月～２月　遺物の整理，実測，図面の整理，図版の作製，実測図の作製，原稿執筆，報告書の作製及び編集，報告書を印刷所へ送る。

昭和55年３月　報告書の刊行

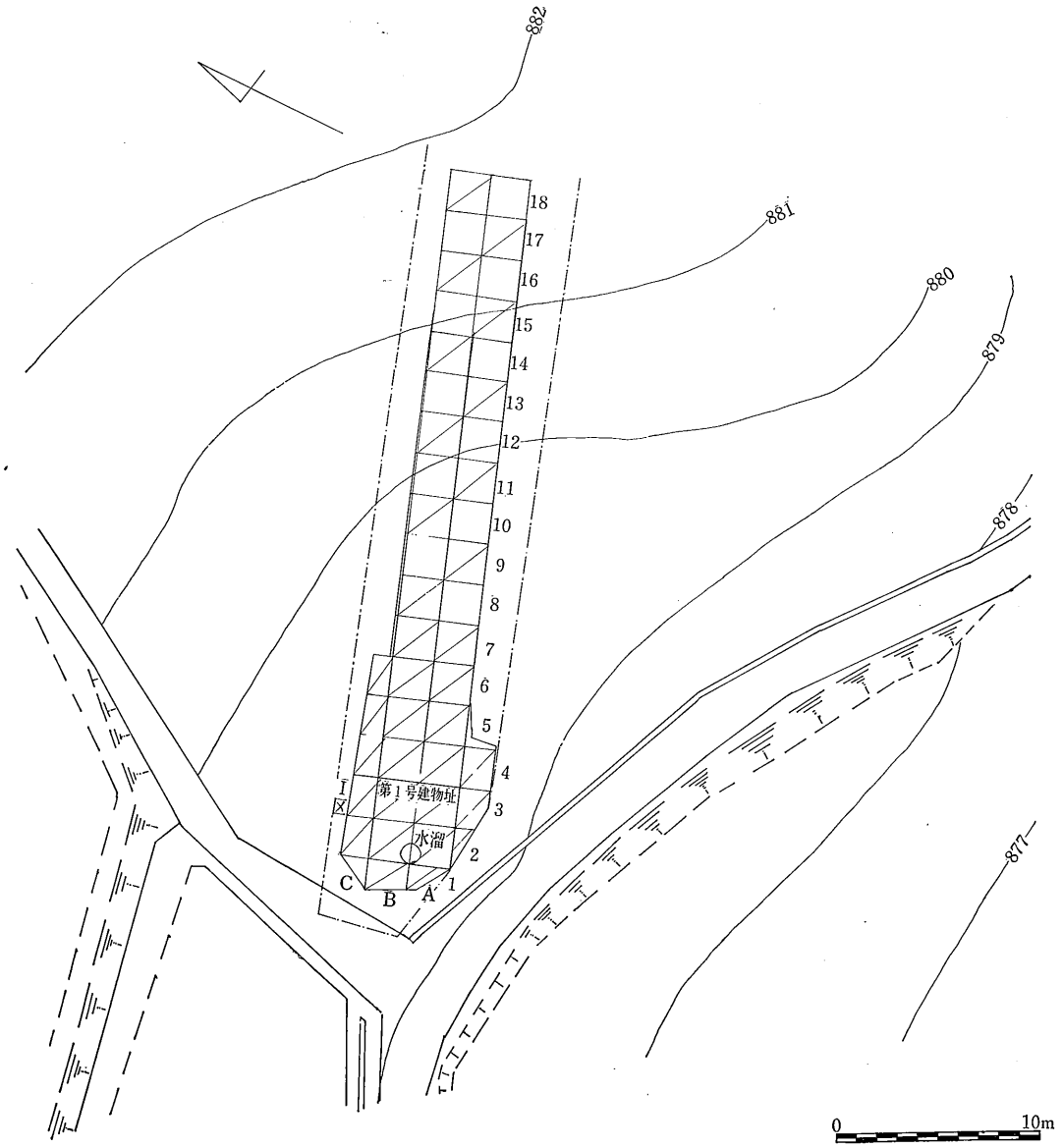
（飯塚政美）

作業員名簿

平沢公夫，池上大二，赤羽幸寿，唐木馨，原修一，後藤重美，登内政光，大野田三千代，小池八重子，中村美さを，平沢八千子，小田切房子，保科徳子，白鳥あき子，井口はる子，酒井とし子

（敬称略　順不同）

第Ⅱ章　遺　　構



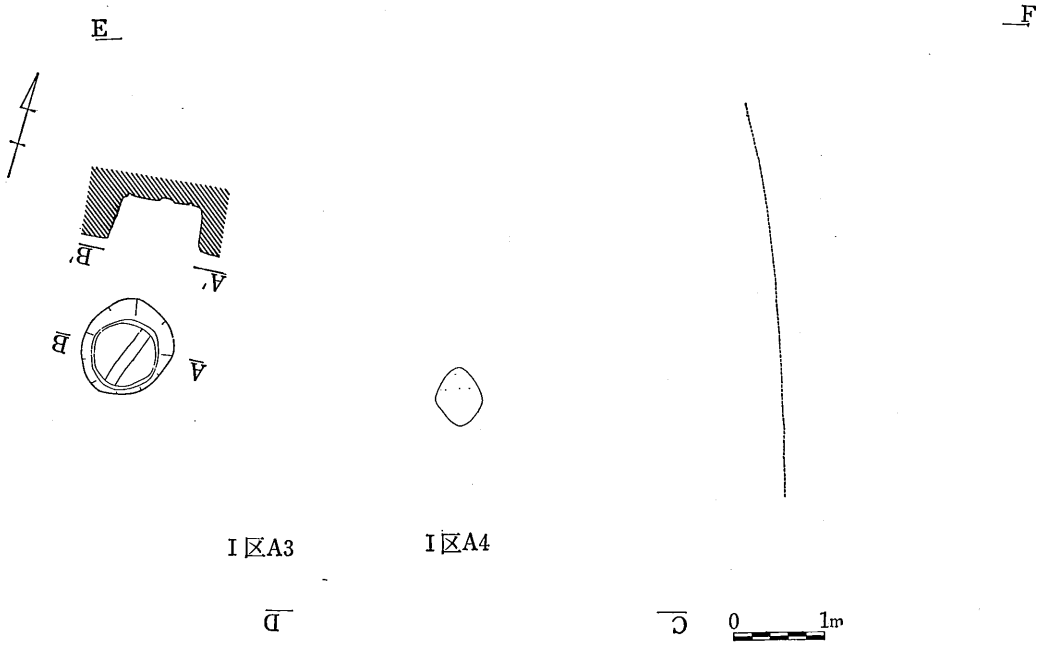
第1図　第Ⅰ区遺構配置図

4351
4330-2
4336
4334
4330-4-4
4330-1
880
875
870
865
860
885
890
5161
5162
5167
5167-1
5164-1
5164-2
5164-3
5166-1
5166-a
5163
5208
5206
5201-a
5192-1
5191
5194-3
5195-1
5195-2
5195-4
5195-a
5193-1
5195-3
5191-4
5190-3
5191-2
5196-1
3496
外郭部(あしだやしき)
内郭部(内館)
土塁
堀
30m
10
0
900
890
880
870
860
850

第2図　城郭址実測図

第1節　建　物　址（第3図，図版2）

本遺構は第Ⅰ区Ａ２～Ａ６，Ｂ２～Ｂ６，Ｃ２～Ｃ６のグリット附近の範囲内に広がっており，発掘ができる用地内は帯状に細長くなっているために，その規模は不明であった。ただ，掘っていく段階で，黒褐色土層面中にかたい面が，検出された。附近の古老に聞いてみるに，このところに江戸時代の終わりころから明治時代に民家があったと聞いた。本遺構は当然，土台石で基礎を成していたと思われるが，それは検出されなかった。前述したかたい面は土間的なものと思われる。Ａ４からＢ４にかけて焼土の堆積がみられた。南側のＢ２附近に南北１m10cm，東西１m位の円形状の落ち込みがみられた。掘り下げていくと，壁面はくずれないように粘土でつきかためてあった。底面は大般平坦で，かたく，円周に沿って木桶を埋めたと思われる数cmの溝状の落ち込みがみられ，さらに南北に木桶の底に移動しないようにつけた木板の跡がみつかった。これらの溝状のなかから木片の破片がみられた。この遺構は位置，あるいは状態からして，溜桶的な用途をなしていたものと思われる。遺物の出土は何もなかった。　（飯塚政美）

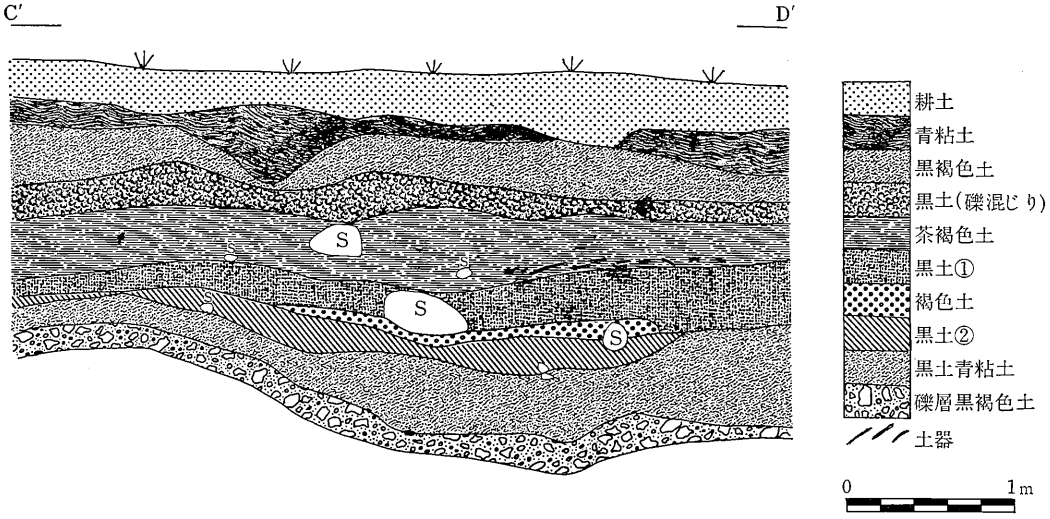


第3図　建物址実測図

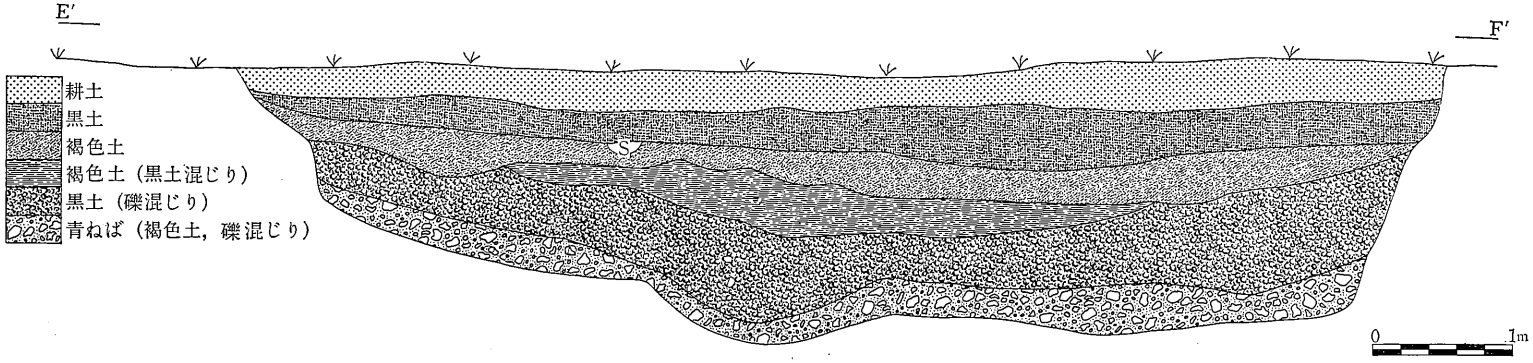
第2節　第Ⅰ区地層（第4～5図，図版5）

第4～5図はⅠ区の地層図で，第3図と照合してみてもらいたい。山麓地帯なので堆積層序が複雑で，かつ何層にも及んでいる。これらの層の間に土器片がサンドイッチ状に走り込んでいた。

（飯塚政美）



第4図　第Ⅰ区土層実測図



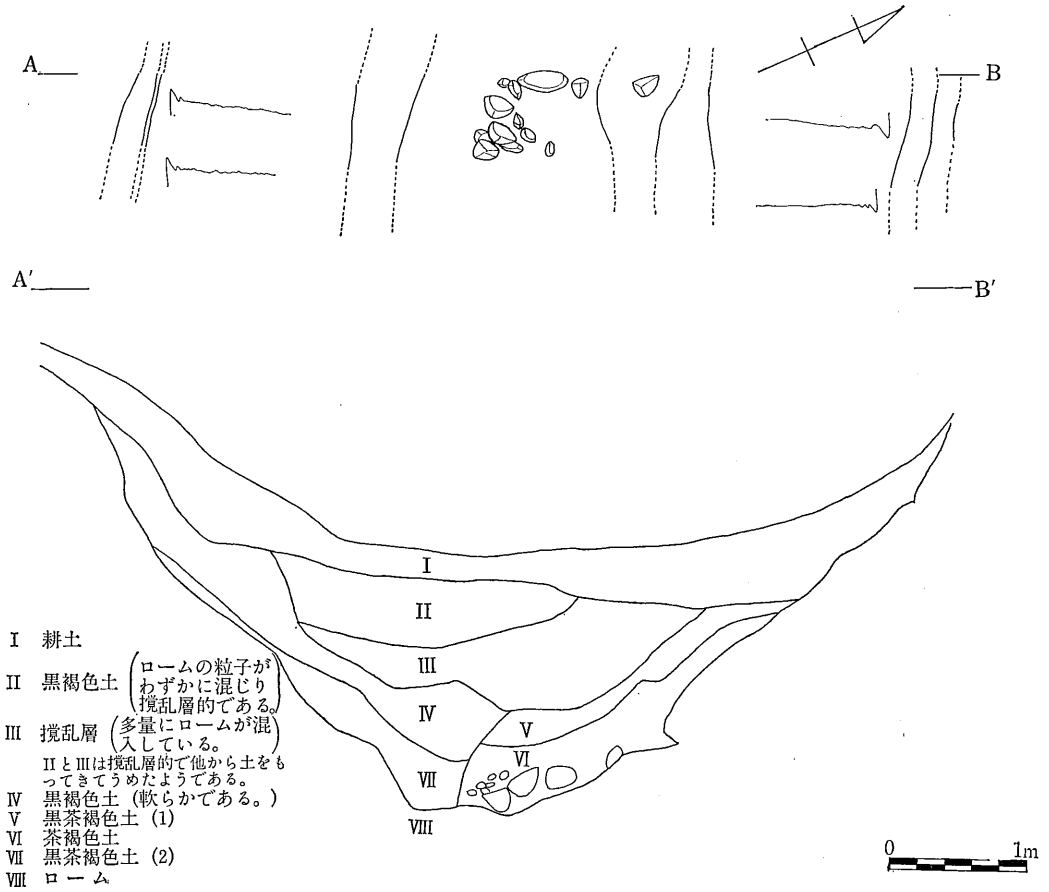
第5図　第Ⅰ区土層実測図

第３節　城郭址と堀址（第２，６図，図版３～４）

本城郭の存在する地形的な状態は次のようである。経ケ岳山系に連なる山麓扇状地の扇頂部にあたり，標高は858.6m～891m位のうちに位置している。等高線でみればすぐわかるように，全般的な地形はわずかな角度で西から東へ傾斜している。形態は平山城であろう。

西側の外郭部（第２図の断面Ｅ・Ｆの西側をさす。）と東側の内郭部は一つの大きな堀によって区別されている。外郭部の規模は南北約100m，東西約162m，比高差20.4m程，内郭部の規模は南北約115m，東西約94m，比高差12mをそれぞれ測定できる。

外郭部と内郭部の境界線上に南北に長さ約48m，高さ約1.3mの土塁が構築してあった。外内郭部ともに，現況は，山林や畑に利用されている。ところどころに両郭とも，段が数段にわたってみられるが，これは，かつて畑作用に利用されたものか，直接城郭に関係した遺構かは現在のところでは判然としない。おそらく，全面的な発掘調査を実施したならば，この問題はある程度は解明できると思われる。



第６図　堀址実測図及び断面図

堀址は人工的なのと，自然の沢を利用したのと二つに大別できる。外郭部に連なる堀址は城郭の最西端は北側の堀と，南側の自然の沢と連結している。南側の沢は幅約22m，深さ約９mを測定でき，急傾斜の段丘崖を形成している。北側の堀は幅５m50cm，深さ３m20cmを測定できる（現況は埋まってしまってその規模は用地内で堀址の発掘を行った部分の数値をもとにしている。）。この発掘した部分の地層は第６図堀址実測図及び断面図により，上から耕土，黒褐色土，撹乱層，黒褐色土，黒茶褐色土（１），茶褐色土，黒褐色土（２）の層序で堆積していた。掘り込み面はローム層であり，上部はソフトローム層，下部はハードローム層の様相を呈していた。この堀址は先に述べた連結部から東西に約160ｍ位続き，外郭と内郭の境界を成す堀へと続いている。この堀址は勾配からして，さきの連結部より最初は水を取り入れて，流し掘りにし，あとで手を入れて，かっこうをよくしたものと思われる。

両郭の境界を成す堀址は南から北への傾斜があり，これも最初は南側の沢をとめて，水を取り入れ，流し掘りにしたものと思われる。規模は埋まってしまって，はっきりした構築時の数値は把握できないが，現況では長さ約60m，平均幅約９ｍ，深さ約３ｍを測定できる。

南側の沢は先に述べた連結部より東へ約160ｍ程流れると両郭境界の堀に至る。この附近は幅約31m，深さ約10m程を測る。さらに東流して約90m程行くと，鍵の手に北へ流れる。この附近の幅約６～７ｍ，深さ約2.5mを測る。北流して約36mほど行くと，鍵の手に東へ続く。この状態は現在では自然の小さな沢ではあるが，城郭址の堀に利用するために，わざと，川筋を曲げたものと思われる。自然の川にしては，このような曲折の仕方はまずありえないと思われる。

北側の沢は幅約10m，深さ約３～４ｍ程を測る。この沢の西側は両郭境界の堀と接し，東へ流れて，西箕輪中条公民館の南側で，南側の沢と一緒になっている。

篠田徳登氏『伊那の古城』によれば，『中条公民館の右裏手を上手村，左手を垣外村，下手を下村と呼んでいる。この城館址は上手村と垣外村にはさまれたところに位置して構築されている。南側の川はしろの堀と言っている。この川は氾濫すると見えて，砂防ダムや保安林がみられる。城の内郭部を中垣外，外郭部をあしだやしきと言っている。中垣外は現在は桑畑や松林に利用されている。』

今回の発掘は部分的であったので城郭址に関連する遺物の出土は何もなかったが，全面発掘をしたならば，遺物の出土があると思われる。中垣外という小字名からして，城郭址の居館の中心部はこの地と思われる。

最後に，この城郭址の測量に地主側の立場から御協力下さった東京都大田区在住小阪苗昊秀（ひこひで）氏に厚く感謝する次第であります。

（飯塚政美）

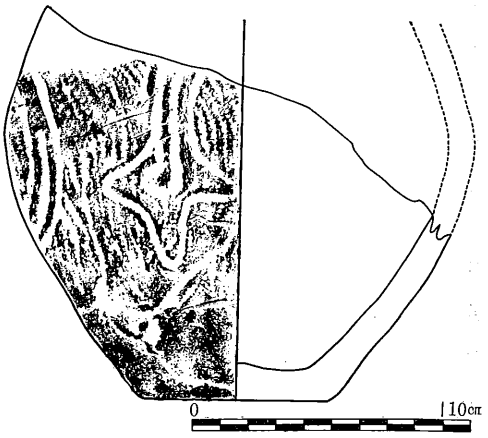
第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　　器（第7～9図，図版3～4）

第7図の土器は第Ⅰ区Ａ3より出土した。胴部上半と口縁部は欠損しているので，器高は不明である。底径は 6.7cm を測定できる。文様はＬＲ縄文を斜目に施文し，その上に沈線を一部では弧状，また一部では方形状に配してある。色調は茶褐色を呈し，焼成は良好，胎土に少量の雲母を含む。

本土器は加曽利Ｅ期に属していると思われる。

第8図の1は第Ⅰ区Ａ3のグリットで出土した土器である。口縁径は31cm，器高，最大径，底径は下部が大部分欠損しているので不明である。器厚は10cm内外を測定できる。器形は現存する部分より察して，胴部にふくらみを有する平縁口縁の深鉢型土器である。



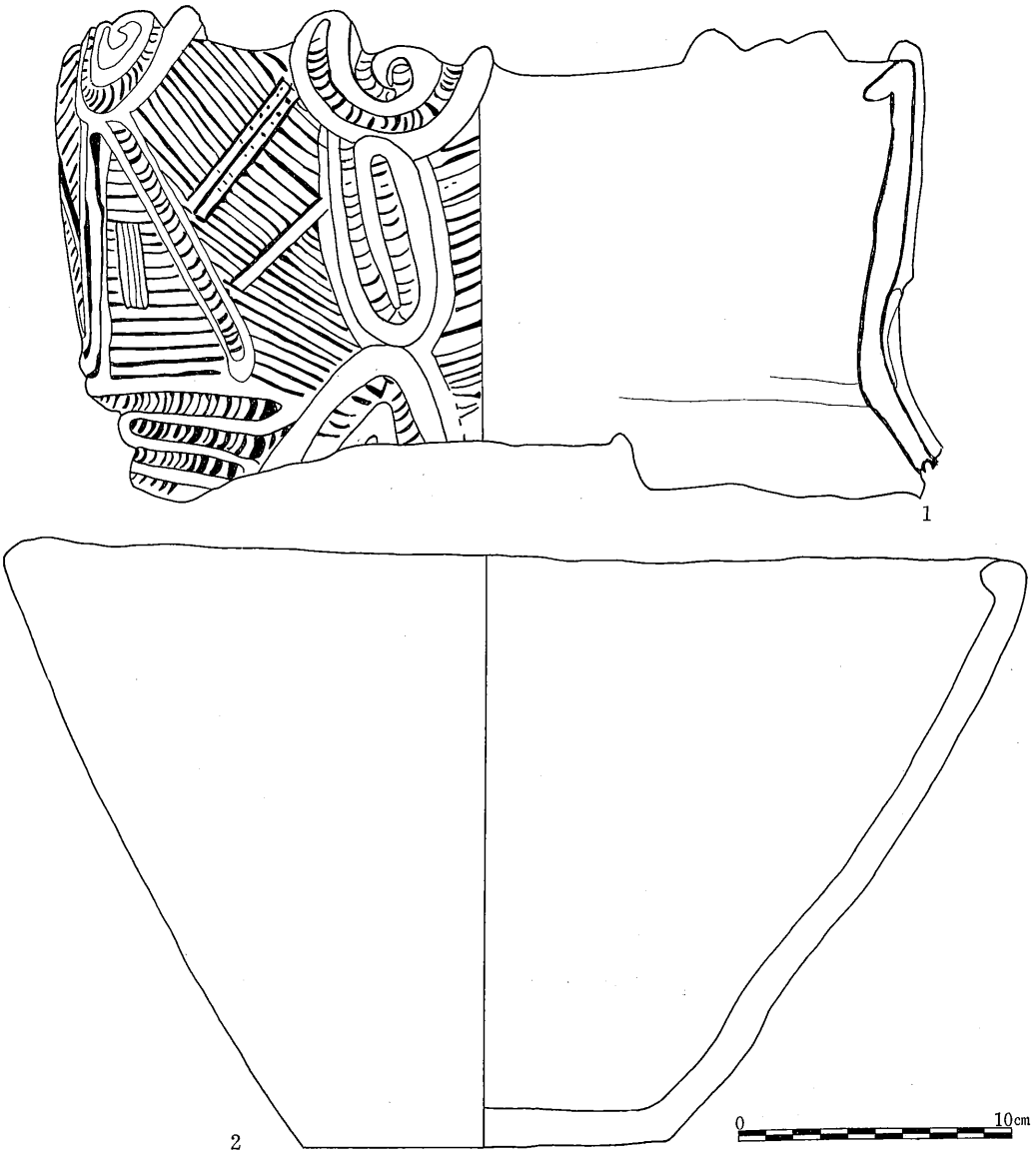
第7図　土器実測図

口縁上部の文様は大般等間隔に隆線による渦巻文を口唇部に向かって半円形に配し，結末は口唇部よりやや上につき出ている。隆線によって囲まれた中に刻目をつけてある。口縁中央部の文様は半円形に配した文様から下に向かって粘土紐を斜目状に，左右対称状に，長円形に配し，その結末は胴部上部にまで達する。胴部上部の文様は粘土紐を横位に貼りつけ，その間に刻目をつけてある。口縁から胴部にかけての主体文様は半割竹管による沈線を縦横，斜目状に不規則に配してある。

焼成は良好で，少量の長石を含む，茶褐色を呈する。本土器は縄文中期後葉の前半，つまり加曽利Ｅ期の古い方に属すると思われる。

第8図の2は第Ⅰ区Ａ4より出土した土器である。口縁径は37cm，器高は21.6cm，底径13.4cm，器厚は1.1cm内外を測定できる。文様は外面全て無文である。口縁部がわずかに内反する平縁口縁浅鉢型土器である。焼成は普通で，胎土に長石粒を含む，黄褐色を呈する。

第9図の土器拓影を説明する。(1)は胎土に多量の繊維を含んでいる。文様は無文である。縄文早期末葉に位置づけられよう。（2～3）は縄文前期に位置づけられるもの，(2)は荒い縄文の上に細い粘土紐を貼り付けその上に大きな爪形文を配してある。(3)は斜縄文や横位の縄文が入っている。(2)は北白川下層式と思われる。(4)は平出3Ａ式と呼ばれている土器で，沈線が横位や縦位に施してある。(5)は沈線と刻目が顕著にみられるもの。(6)は，(4)と文様は類似しているが，ただ，破片上部に楕円状に隆起文がみられる。（7）は低い隆帯が走り，その縁沿いに刻目がみられる。（8～9）は高い隆線がみられ，その上に刻目のつけてあるもの。(8)は櫛形文状になっている。（5～9）は縄文中期中葉に位置づけられると思われる。一般的に言われている勝坂式



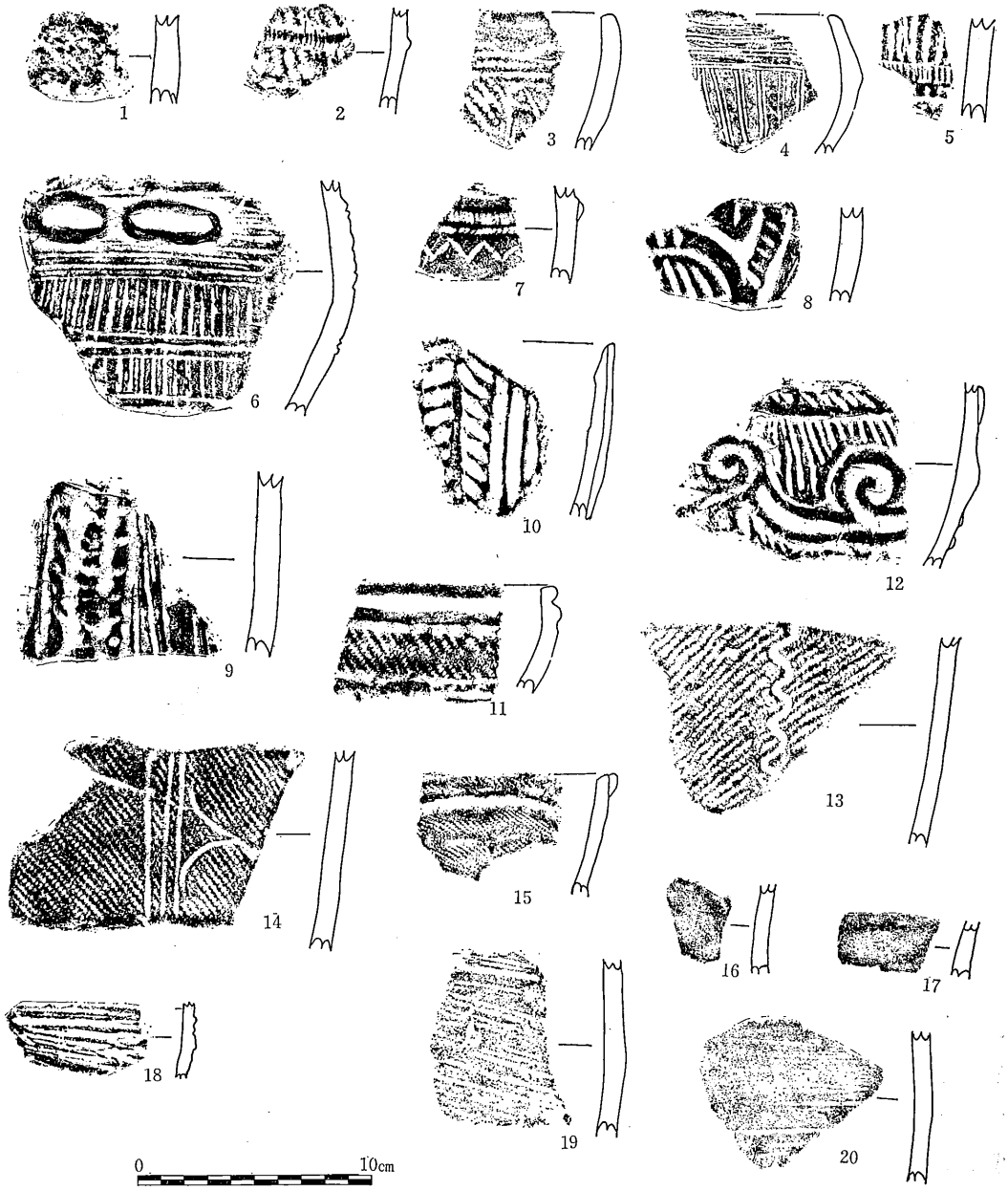
第8図　土器実測図

の一派であろう。(10)は細い粘土紐を縦位に貼り付け，それらの間をはしご状に横位につけてある。これは加曽利E期の古い方に位置づけられると思われる。

(12)は粘土紐を渦巻状につけてあるもの，(13～14)は縄文地に懸垂文のみられるもの，(13)は懸垂文が蛇行状に，(14)はそれが直線状に走っている。(11～14)は加曽利E期の土器と思われる。(15)は磨消縄文的な手法のみられるもの。(16～17)は無文であるが，焼成は極めて良好であって，胎土もち密である。(18～20)は条痕文土器といわれている一派である。条痕のなかでも

(18)は割合に粗い。(16～17) は縄文晩期のなかでも古い方に属し，(18～20) は縄文晩期の新しい方に位置づけられると思われる。以上，縄文土器を拓影によって述べてきたが全般的にみて縄文早期末葉から縄文前期，縄文中期，縄文後期，縄文晩期と各時期にわたって出土していることがわかった。さらに北白川下層式のように関西系土器の出土は東西文化交流の上で重大な問題点を提供してくれた。

(飯塚政美)

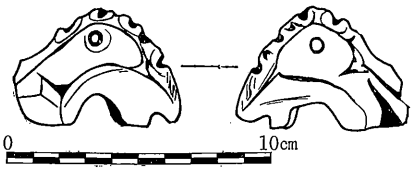


第9図 土 器 拓 影

第2節　把　　手（第10図，図版6）

本遺物は第Ⅰ区Ｂ５より出土した。全体的な形はどうもハ虫類の一種であるトカゲの頭を抽象化して形造したものと思われる。

口先の上アゴは若干丸味を呈し，下アゴは欠損している。目の部分は一段高くしてあり，特にまなこは中空円形竹管によって押して施文したように思われる。頭部全体のほぼ中央部に隆帯を貼り付けて，その上に蛇行状の刻目を配してあり，全体的にみるとトサカのようなものと思われる。



第10図　把手実測図

色調は黒褐色を呈し，焼成は中位である。胎土中には多量の長石を含んでいる。時期的には把手の隆盛する勝坂式の一派に含まれるものと思われる。

（飯塚政美）

第3節　石　　器（第11図，図版6）

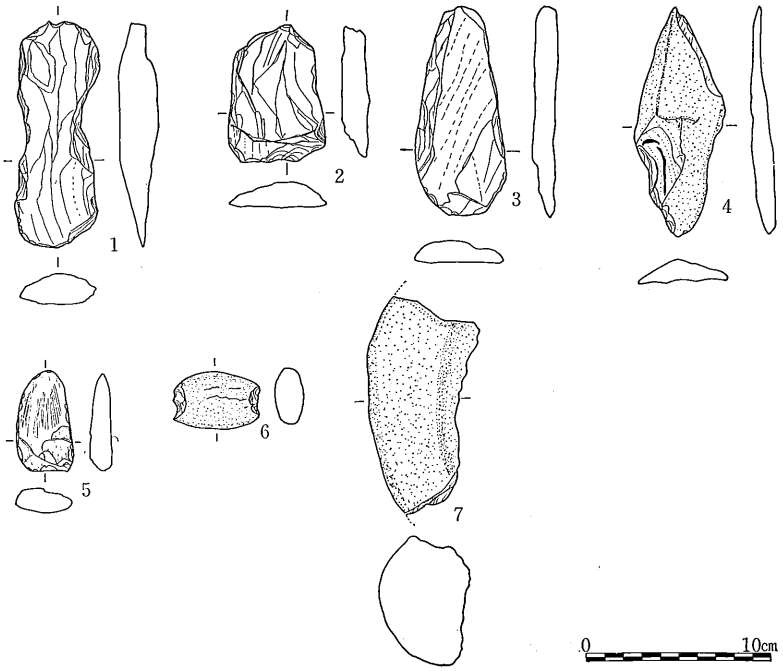
今回の発掘で出土した石器の総数は７点である。（１～４）はグリット内から出土したもので，全て打製石斧に属していると思われる。石質は，（１，２，４）は緑泥岩，（３）は泥岩を用いてある。１は分銅型，（２～３）は下部がわずかに開く撥形，（４）は不整形状を呈している。（１～３）の剝離調整は丁寧であるが（４）は粗雑な姿であった。

（５）はグリット内の出土で，緑泥岩の小型磨製石斧である。刃部や剝離の調整は丁寧で全面に及んでいた。

（６）はグリット内の出土で，硬砂岩を利用し，両端を打ち欠いて凹みを入れた石錘である。欠いた部分は丁寧に剝離を入れて使用がうまくできるようにしてある。重さは25ｇを測る。

（７）はグリット内出土で，安山岩を利用した石皿の破片で，大部分は欠損してしまっているので，大きさや，中央部の凹みの大きさや深さは不明である。

（飯塚政美）



第11図　石器実測図

第Ⅳ章　ま　と　め

堀の内遺跡を考える場合，そのなかにある中城の居館址についての歴史的背景を考えてみなければならない。篠田徳登氏の『伊那の古城』によれば，次のようになる。『中条氏は郡記，古系によると，天文元年（1532）に上杉定実の家臣，唐沢隼人源ノ昌綱という人がこの地に居館を構えた。その子唐沢備前義景の代に，飯島町石曽根に移った。弘治２年（1556）武田信玄伊那侵入の際に，父子ともども，領地没収にあった。』なお，飯島町石曽根に館を構えた所は現在「唐沢城」と呼ばれ，昭和49年度飯島町教育委員会で発掘調査を実施し，現在報告書が刊行されている。

南信伊那史料（伊那武鑑根元記）によれば『中条氏は応永８年（1401），この村に来たりて居を構え在名をもって家名とし代々これに住む。初代は笠原中務少輔，弟左近進信政。次が中条新左ヱ門信度。左馬の助信辰。左近進信政に至り，中条の八ツ手のうちにて百五十貫文を領して住むと。この時高遠の仁科五郎盛信に属していたが天正10年織田の高遠討入の時防戦に加わったが遂に利あらずして討死し，家名を失ってしまつた。その長子八郎は民間に降ると』と記してある。

以上歴史的背景を文献によって述べてきたが，今度は部分的ではあるが，実際に発掘した成果に基づいて考察してみよう。城郭址の規模及び城郭址に関係した遺構等々については本文中第Ⅱ章，第３節城郭址と堀址に詳細に述べておいたので，今回は割愛させていただく。全般的にみて，第６図堀址実測図及び断面図より，堀は箱薬研的な形態を成しており，堀の変遷からみて，室町中期以降と考えられる。全面的な発掘調査が可能であったならば確実なる時代決定のできる遺物が出土したと思われるが，一部分だけであったので，何も遺物の出土しなかったことはおしまれる点である。

第Ⅰ区より検出された建物址は近世から近代へ至る民家であったろうと思われる。日一日と近代的な家が建てられ，今は忘れさられようとしている民家がこのような状態で出土したことは，今後の研究に大きなプラスとなると思う。

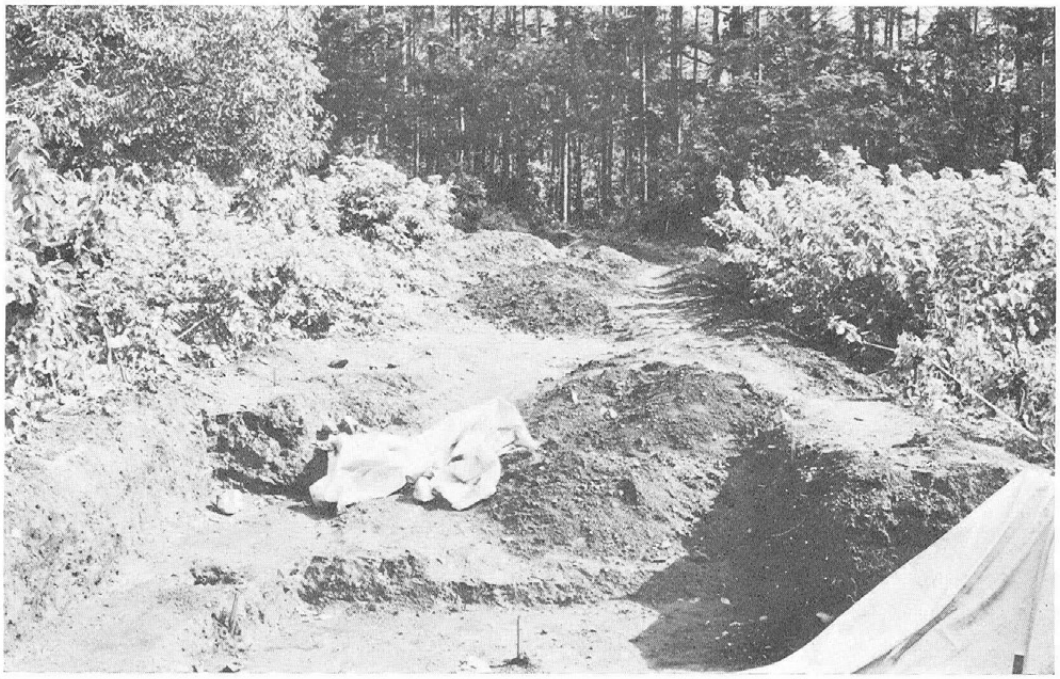
第Ⅰ区地層内から土器が層状に出土した点を考えてみると，次の二つの問題提起ができると思う。第一として，遺跡地の地形が西から東への傾斜が強い。また，地層の層序が山麓の押し出しによる可能性が強く考えられる。これらを総じてみると，土器流入説。第二として，出土状態からして，流入にしてはあまりにも重さなりのしかたが見事である点，さらに土器片には流れてきたような磨耗の跡がみられない点，以上をもとに考えてみると，土器捨場説。

以上二つの説が考えられたが，諸条件を顧みて，後者の土器捨場説が最も妥当な線に落ち着くものと思われる。この附近で出土した土器は縄文早期末葉，縄文前期，縄文中期，縄文後期，縄文晩期の各時期にわたっており，全ての時期に利用されたものと思われる。

（飯塚政美）

図　　版

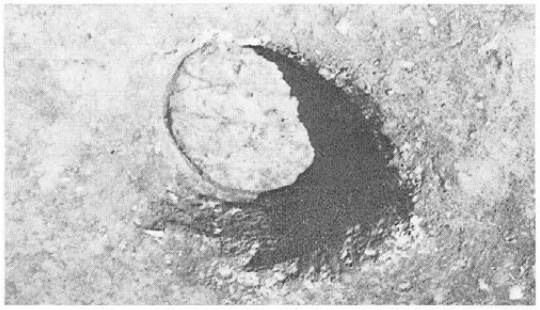
遺跡地を北側より眺む（林の中が城址）



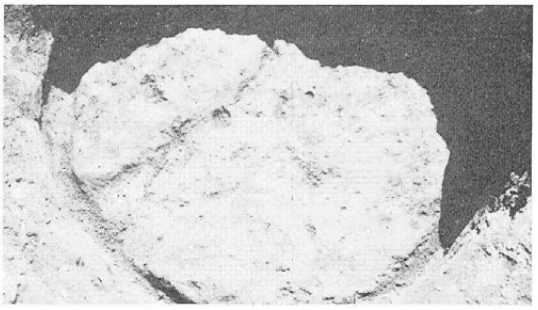
遺跡地近景（Ⅰ区を南側より眺む）

図版１　遺跡全景

近世の建物址



便所の溜桶の全景



便所の溜桶を上から見た状態

図版２　遺　　構

城の本郭部（西より眺む）

城の本郭部（東より眺む）

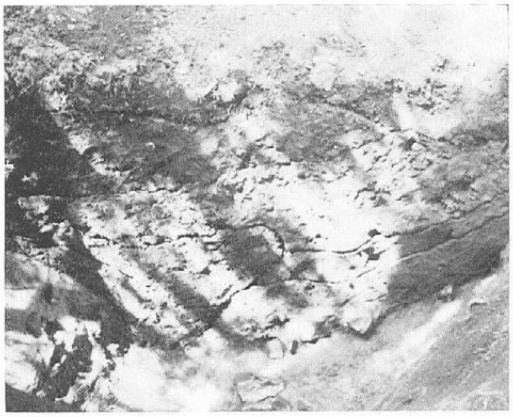
図版３　遺　　構

堀址（東西に縦状に走る）

堀址（南北に横状に走る）

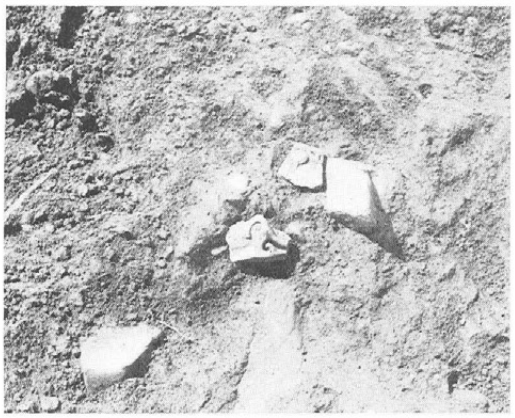
図版４　遺　　構

Ⅰ区土層状況

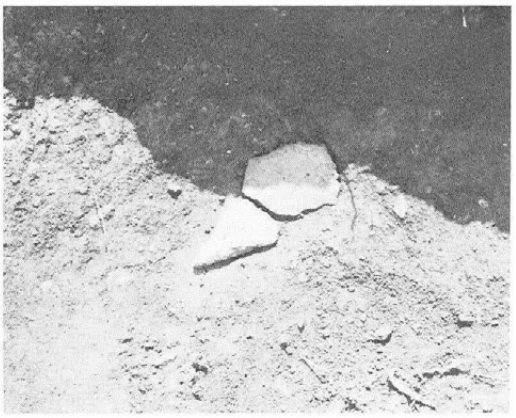


堀址の断面

土器出土状況

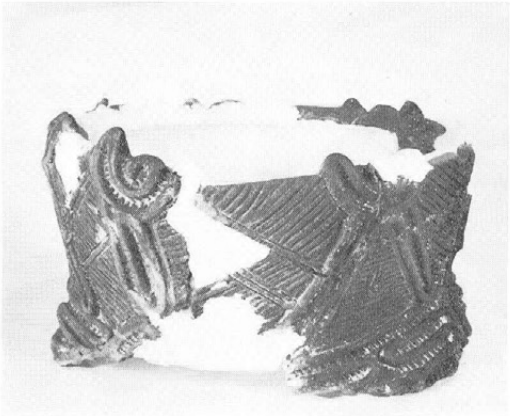


土器出土状況



土器出土状況

図版５　遺構・土層及び遺物出土状況

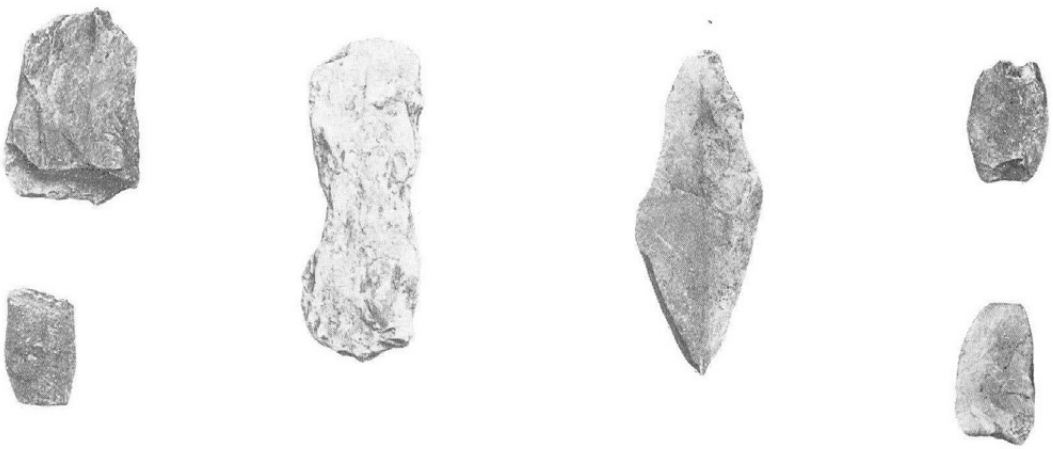


出土土器

出土土器

出土土器

把　　手



出　土　石　器

図版 6　出土遺物

堀の内遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和55年3月15日　印刷
昭和55年3月17日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　株式会社　ぎょうせい
東京都新宿区西五軒町52